責任をもちだしたところに、今回の議論の不毛がある。

集団主義の典型として、制服がある。あなたの幼稚園で保育園で、制服を止めてみませんか。制服を止めて困る理由を考えてみてください。園児とそれ以外の区別がつかない。その園に所属する誇りがもてず、統制がとれない。どんな理由も、集団主義に根ざしていることに気付く。

突出した行動を嫌う集団主義から、「背」でも自己主張できる、自己責任の社会へ脱皮しませんか。

（日本工業大学）

背中で、背中から、感じること

槙谷　厚子

まるで背中にも目があるみたい……尊敬する保育者である堀合文子先生の保育を見せていただいたときに、多くの参加者からため息とともに聞こえてくる言葉である。私たち保育者は、一人ひと

りのお子さんの小さなつぶやきも、ちょっとした動きやさり気ない表情の変化も敏感に受けとめ、その子に応じたかかわりが自然にできたら……と願い子どもたちとともに生活をしている。

しかし、現実には目の前のことに追われてしまったり、挙句の果てに「先生　聞いてるの？」などと言われてしまうこともあり、反省の日々なのである。本当に背中に目があって、なおかつ心の中まで読み取れたらと思うけれど、よく見えないから考えるし、すぐにわからないからわかりたいと思うのだと思うと、真剣に一人ひとりと向き合い、心を通わせようと一瞬一瞬を積み重ねることが、いかに大切なのかと改めて思う。だが背中の向こうで、かかわりあう子ども同士のやり取りや、聞こえてくる会話から感じたり、想像したりできることがたくさんあることも事実である。

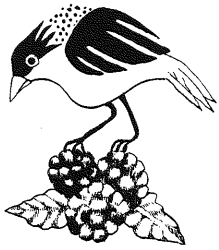
入園当初、まだお母さんと離れがたく大泣きする三歳児。大丈夫だから……と母親に目で合図してさっと抱き取ることもある。母親までもが涙ぐみ、まさに後ろ髪引かれる思いなのだろうと察しながらである。保育者に安心して身をゆだねられずに拒否されてしまうこともある。しかし、ぎゅっと抱かさってきてくれれば、あとは落ち着くのを待てばすんなりと来られるようになることが多い。よく考えてみるとそれは子どもだけの問題ではなく、安心して背中を押してくれる母親と、それをしっかりと笑顔で受け止める保育者との信頼関係が、できてくることも密接な関係があるのである。

園生活に慣れてくると、朝も元気に「おはようございます」と走りこんでくる笑顔。あるとき保護者会で「そんな、はちきれそうな笑顔を独り占めしているようで申し訳ないくらい……」とお話

すると、あるお母さんが「元気に走りこんでいく子の背中を見送るのもいいもんですよ」と言ってくださった。そういえば私も降園時、「あのねー」とちょっぴり誇らしげに母親や、お友達のお母さんに走りよって、園での出来事を報告している背中を見るのもうれしいと気づかされた。

朝、子どもたちを迎えていると必ず誰かが背中に負ぶさってくる。「だーれだ?」と聞かれて声だけで当てれば大喜び。やけに重たいなと思ってみると年長児だったりすることもある。この頃になると、リラックスしてきて、夢中になって遊んでいて思わず保育者に対して「ねえ、ママ」とか「あのね、お母さん……」などと声をかけてくることがある。家でくつろいでいる時と、同じような心持ちでいてくれると思うとホッとする瞬間である。

ふと気がつくと、床にしゃがんで子どもとかかわる私と背中合わせに座るA君がいる。なかなか友達とかかわれないが、やっと安心して園で過ごせるようになってきたところだ。無理やりひざに乗ってくることもあるが、最近この場所がお気に入りのようだ。そんな時A君がどんな顔をしているのかわからずにいたが、ある日もう一人の保育者に対して同じ体勢で座るA君を発見。それはうれしそうに、他の子どもたちの遊ぶ様子を見ているA君であった。背中にぬくもりを感じながら、和んだ表情でいるA君を見て、こんなひと時も、A君にとって穏やかな大切な時間だと感じた。



十月の半ば頃、弟の誕生後初めて、祖父に送ら

れて登園してきたB君。まだ人気の少ない園庭に元気に走り込んで来た。「おめでとう。お兄ちゃんになったんだね」と挨拶を交わした。祖父とも少し話をして急いで保育室に行くと、ロッカーにかばんをかけるB君の背中がいつもと違う。声をかけると、振り向いたB君は、必死で涙をぬぐい、私に抱きついてきた。お兄ちゃんになった喜びなど感じる余裕もない、複雑な心境をB君の背中は語っていた。でもこの一度の涙のみで、後はいつものように遊び、はつらつと過ごしていたB君であった。しばらくしてお母さんが、「何だか急にお兄ちゃんになってしまったみたいで拍子抜けしているんです」とおっしゃっていたので、このときのことを伝えると涙ぐんでいた。

年少の生活も終わりに近づき、進級を心待ちにする頃。C君のお母さんからこんな話を聞いた。「入園式の時の記念品の身長計で毎朝、身長を測るのがCの日課なんです」と。C君は三月末の生まれで、確かに小柄だがファイトあふれる男の子である。今は一〇〇センチメートルになるのが目標で、日によっては、縮んでしまってがっかりする日もあるとか。大きくなりたいというC君の思いが、ひしひしと伝わってきた。一〇〇センチメートルに到達する日は、そこまできているようだ。

まだ一〇〇センチメートルにも満たない小さな身体からあふれるほどの大きなパワー。入園当初からは想像もつかないような成長が感じられるようになる。大きくなりたいと思う気持ち。それが成長の原動力かもしれない。そんなパワーに支えられて日々を重ねられること。感謝である。

（浦和のぞみ幼稚園）